

むかし、あるところに、唐からのカンニユウ卿きょうという大金持ちがありました。その家に、男の子が生まれました。ところが、その子は、いつもむずかかって泣ないてばかりいました。母親も乳母うばも、こまりはてていました。

あるとき、男の子が泣いていると、天井から、虫がいつびき、糸を引いて下りてきました。それがとても美しい虫だったので、乳母はふしぎに思って、針はりの先でちよんと虫をついてみました。虫は、その針の先をクンと食べてしまいました。またちよんとつくと、またクンと食べます。とうとう一本の針ぜんぶ食べてしまいました。すると、いままでどうしても泣きやまなかった子どもが、急にきげんがよくなってにこにこ笑わらいだしました。

乳母は、

(おかしなこともあるもんだ) と思って、旦那だんなさんに話しました。旦那さんは、

「ほんとうか」といって、虫を針でつつきました。するとやっぱり、クン、クンと、ぜんぶ食べてしまいました。

子どもは、その虫さえ見ているとおとなしいのですが、虫が見えなくなるとすぐに泣きだします。そこで旦那さんは、虫に針を食べさせて大切に飼かうことにしました。

やがて虫はだんだん大きくなって、しまいに、釘くぎを食べるようになりました。それからまた大きくなって、鉄の棒ぼうを食べるようになりました。そうして虫は、とうとう牛ほどの大きさになりました。

旦那さんは、さすがに気味が悪くなって、虫をころしてしまおうと考えました。ところが、鉄を食べて育ったものですから、体がかちかちにかたくて、こん棒ぼうで打つても、刀で切つても死にません。思案しあんにあまつて、千挺せんちやうの踏鞴たたらを立てて虫を焼くことにしました。虫は苦しがつて、家を飛び出していきました。そのとき、まっ赤に焼けた虫が、カンニユウ卿の家の門に触ふれて、あつというまに火事になって、家がぜんぶ燃もえてしまいました。

それからというもの、一夜のうちに貧乏になった者を、唐のカンニユウ卿というようになつたそうです。